

令和4年度 自己評価・学校関係者評価報告書

学校法人高渕学園認定こども園あかね幼稚園

1. 本園の教育目標

- 子どもの天分を助長し、心身の調和的発達を図る
- ✧ 天から与えられ、生まれ持った子どもの性質や才能の成長を助ける。
 - ✧ 心も体も、バランスの取れた発達ができるよう、取りはからう。

2. 本年度の重点目標

- コロナ禍の子どもの発達や教育の工夫
- 幼保小連携で指摘された「語彙数の少なさ」への取り組み

「3、4」評価結果の表示方法

A	十分達成されている
B	達成されている
C	取り組まれているが、成果が十分でない
D	取り組みが不十分である

3. 評価項目の達成および取り組み状況

評価項目	結果	理由
I 教育の計画性	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ コロナ禍で今まで通りの教育や環境設定、また遊びの設定や展開に限りがある中、手探り状態で取り組んできた。全教職員で情報を提供し合い、取り組んできた。
II 園児への対応	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ コロナ禍3年目、感染症に臆することなく、近隣で流行のない時期は、なるべく教職員は、子どもたちに表情を見せ、スキンシップも大切にしてきた。その結果、コロナ禍2年で見せることができなかった教職員の顔全体や表情で感情を伝えることができた。 ・ 教職員がマスクを外しているため、子どもたちの体調の変化を見逃さず、早期に対応するように努めた。
III 教育保育内容	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前例に倣うことができず、手探りで計画をしているため、想定外の問題に遭遇することがあった。目の前にいる子どもたちが、今求めていることに着目し、早急に対応できるように努めた。今まで、気付かなかった環境に気づき、新たな教育保育にチャレンジすることができた。もっと教育保育に生かせる本園の環境がありそうなので、研究を続けたい。 ・ 普段使わないが、一般として知っている単語も意識して使うようにした。また、どの分野の語彙が苦手なのか調べ、普段の生活の中に組み入れ、発語できるようにうながした。
IV 健康及び安全	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ コロナ禍にあるため、子どもたちの変化に細かく目を向け、保護者と連携をとりながらやってきた。手洗いやうがいの仕方など、自己防衛の方法もしっかりと指導した。教職員は、マスクを外すことで、会話の際の口の動きや顔の表情にも着目させられるようになった。

V 地域とのかかわり	B	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍3年目のため、地域との関わり工夫に地域と一緒に考えてきた。感染症対策を行いながら、前年度よりは、活動できた。
VI 研修と研究	B	<ul style="list-style-type: none"> オンラインでの研修も増えたため、移動に時間をかけることなく、受講できるため、研修への参加は充実していた。各々の技術の向上への意欲が高く、満足にいく結果にはつながらなかった。今後は園内研修を充実させ、教職員一人ひとりの、研究課題や技術の向上に努めたい。
VII 教師の資質	A	<ul style="list-style-type: none"> さまざまな事件のニュースを受け、個人情報の取り扱いには、非常に力を入れている。また、人として、あいさつや感謝の気持ち、身だしなみに気を付けている。自分の言動の影響力を知り、外に持ち出さないようにしている。また、やらなければならないことやべ切なども守るように心掛けている
VIII 保護者対応	A	<ul style="list-style-type: none"> 配るべき気を使い、適切に対応するように心掛けている。クレームや要望は、園長に伝え、園全体で共有するように努めている
IX 虐待対応	A	<ul style="list-style-type: none"> 日々の子どもの姿に目を配り、見知らぬ傷やけががないようにしている。 家庭の状況にもアンテナを張り、子どもの会話や持ち物など変化を見逃さないようにしている。 園内には、防犯カメラを設置し、視覚になるところがないようにしている。
X 園児の人数把握	B	<ul style="list-style-type: none"> 登園時間に登園していない場合、保護者に連絡をし、確認をしているが、その伝達が細部にいきわたらないこともあった。 園バスで外出する際、人数の確認をしている。しかし、一人ひとり乗降車確認を行った方が、より安全。

4. 本年度の学校評価の具体的な目標や計画の総合結果

結果	理 由
A	<ul style="list-style-type: none"> ○ コロナ禍の子どもの発達や教育の工夫 <ul style="list-style-type: none"> コロナ禍の子どもは、大人がマスクをしていることが当たり前の社会で、3年育っているため、表情を読み取る力の未発達に目を向けた。教職員は、症状がない場合や、近隣の感染症流行がない場合はマスクを外し、なるべく、感情を表情で表すように心掛けた。結果、感情豊かな子どもたちが育ち、表情を読み取ろうと相手の目を見て話す子どもが増えた。 近年の子どもの、自分の体を支える力の弱さに着目し、体幹の意識できるような運動をたくさん取り入れた。結果として、『立つ、座る』などの姿勢の向上につながった。 ○ 幼保小連携で指摘された、「語彙数の少なさ」への取り組み <ul style="list-style-type: none"> 「言葉が通じない子が増えている」と小学校教員から指摘があり、日々の会話に注目した。言い方、言いまわし方、単語など、幼児語になっているところを丁寧に伝え、子ども同士、影響を受け合えるようにした。自然遊びを多く取り入れ、自然物の名称を知ること、どんなものにも名前があることを知り、知らない名称を調べたり、大人に聞いたりできるように意識した。

5. 今後取り組むべき課題と取り組み方法

課 題	具体的他取り組み方法
○ 地域との関わり	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍により、地域との関わりがとても少なくなった。今年度は、少し復活してきたが、もう少し形を変え、地域との関わりを持っていきたい。地域の代表として、南部町商工会青年部の方々とアイデアを出し合えればと思う。『お仕事体験』のような行事が作れないだろうか？など、相談していきたい。
○ コミュニケーション力の向上	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍で、他人との接触機会が少なかったため、自分の気持ちや意見を伝える力や相手の話を聞く力の育つ機会も少なかった。大人の汲み取りの中での会話ではなく、子ども同士の会話の成り立ちに着目し、コミュニケーション力の向上に努めたい。